

「JICO Super Analog Stylus Series -V15 Type III/Zirconia-」を聴いて皆さんにお勧めしたくなったという話。

アナログレコードの人气が復活し、レコード盤から様々なアクセサリが世界中の各社からリリースされ大いにマーケットは活況を呈している。

そんな中で、レコード再生において重要な役割を受け持っているカートリッジ、レコード針の競争も激しく、各社さらなる音質を求めて様々なモデルが発売されている。

その中で目立っているのが MC 型の高級機である。数十万というものもリリースされているが、そのクオリティには目を見張るものがあり、今までのアナログ再生の概念を良い意味で崩すことに成功している部分がある。

しかし逆に MM 型のカートリッジは少し静かなのは確かで、レコードファンの中で 2018 年衝撃のニュースの 1 つに SHURE のカートリッジ生産終了というニュースがある。

SHURE といえばレコード文化を背負ってきたカートリッジメーカーにおいては外せない存在。その SHURE がカートリッジの生産を終了するというニュースは、大げさでなく世界中のアナログファンにインパクトを与えたのである。

ニュースが発表された直後 SHURE ユーザーは交換針を求めて、まとめ買いに走り、瞬く間に市場から SHURE の交換針はなくなってしまった。

途方に暮れる SHURE ファンの中で、救世主となったのが日本精機宝石工業” JICO”という会社である。

SHURE の交換針は手に入らなくなったけど代替の針は手に入る。レコードファンにとって JICO はありがたい会社なのであった。

そして、その JICO が、純粋に交換針をリリースするだけでなく、さらなる音質を求めて、様々な針を開発しているのはご存知であろうか？

今回試聴するのは SHURE の中でもユーザーがとて多い V15Type III である。

オリジナルのカンチレバーは一般的にはアルミの楕円針が多いのだが、今回 JICO からリリースされる「V15 Typ III 用 Zirconia」（品番：SAS/Z 192-VN35）はその名の通り純正のアルミではなくジルコニアが使用されている。

ジルコニアといえば当然アルミよりも質量が多い。

今回 JICO はただでさえ細いカンチレバーを中空にするという離れ業を行い、ジルコニアカンチレバーを製品化することに成功している。

針先の形状はマイクロリッジと言って、レコードの溝を掘るときの針の形状に近いものを採用している（JICO の中で SAS(Super Analog Stylus)と呼んでいる）。

SAS の採用によりトレース能力は格段に上がっている。

MM カートリッジとはいえ、音の情報量はハイエンド機と合わせても遜色ない。

そして何よりジルコニアのカンチレバーの威力は相当で、もとの V15 と比べると、純正も十分に素晴らしいクオリティはあるのだが、ジルコニアを聴くと鈍重な気すらしてくるのである。

何よりも圧倒的に高域の見通しが改善される。これは、ほとんどのユーザーが第一印象として持つであろうわかりやすい変化である。

しかし、このジルコニアを聴いて、憎いくらいに感心してしまったのが低域の力強さである。

ジルコニアの採用によりアルミのそれに比べて高域の改善は予想されたのだが、低域がその代償としてつまらなくなってしまうというこちら側の予想を見事に裏切ってくれた。

個人的にはこの一点が完全にうれしい誤算だった。

このクオリティなら MC の高級機と比べても全く遜色なく、勝負できるのは間違いない。SHURE は終わってしまったけど、JICO がやってくれた。

今 V15 を中古で手に入れて、JICO のジルコニアを使うというのはローコストかつ、本気の音を楽しめるとても良い選択だと思う。

創業 60 周年と歴史のある JICO。

JICO がこの国にある。

救世主は意外と身近なところにいたのである。

OTAI AUDIO 井上ようすけ

オタイオーディオ株式会社

<https://www.otaiweb.com/audio.htm>

